

研究主題

経験したことを表現豊かに書き表せる児童の育成



八街市立朝陽小学校

1 研究主題

「経験したことを表現豊かに書き表せる児童の育成」

2 主題設定の理由

(1) 学習指導要領から

小学校学習指導要領国語科の目標は以下のとおりである。

言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動をとおして、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 日常生活に必要な国語について、その特質を理解し適切につかうことができるようにする。
- (2) 日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を養う。
- (3) 言葉がもつよさを認識するとともに、言語感覚を養い、国語の大切さを自覚し、国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う。

学習指導要領では、「書き表し方を工夫する」ことについて、「自分の考えを伝えるために、どのような言葉を用いるか、語や文及び段落の続き方やつながりをどのように表現するか、といったことなどに注意して記述の仕方を工夫すること」と記されている。

また、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力とは、国語科で表現された内容や事柄を正確に理解する資質・能力、国語を使って内容や事柄を適切に表現する資質・能力である。それらの資質・能力を培うために、日常生活における人との関わりの中で、伝え合う力を高めていくことが重要であると考えられている。

また、第1学年及び第2学年の「書くこと」においては、「経験したことや想像したことなどの中から書くことを見付け、必要な事柄を集めたり確かめたりして、伝えたい事を明確にすること」「自分の思いや考えが明確になるように、事柄の順序に沿って簡単な構成を考えること」を指導すべき事項としてあげている。

(2) 学校教育目標及び本校研究主題から

八街市立朝陽小学校学校教育目標

やさしく 賢く たくましく生きる児童の育成
～努力は今、今の積み重ねが未来をつくる～

八街市立朝陽小学校研究主題

学び合い高め合い、賢さをもった児童の育成
～教師の個別最適な学びの実践～

本校の学校教育目標は「やさしく 賢く たくましく生きる児童の育成」である。めざす児童の姿を「やさしい心を持ち、行動できる児童」「学び合い高め合い、賢さをもった児童」「心身ともに健康で、たくましさを身に付けた児童」とし、知徳体それぞれ欠けることなく備わっている児童の育成をめざしている。

また、児童にアンケートをとってみると、「学校の授業は楽しい」と感じている児童は約9割だったが、「学習した内容を見直し、次の学習につなげられている」と感じた児童が約4割、「課題の解決に向けて主体的に取り組んでいる」と自信をもって回答した児童は約5割、「友だちと話し合う活動をとおして、考えを深めたり広げたりすることができる」と答えた児童は約5割だった。この結果から、授業を楽しく感じているものの、課題解決に向けて友だちと考えを深めたり広げたりできていると実感している児童は少ないことがわかった。そのため、主体的対話的で深い学びの実践に向け、授業の工夫・改善等、より手立てを講じて

いく必要がある。アンケート結果も踏まえた上で、児童の学ぶ意欲が高く、学びを諦めずに、学び方を知り、仲間とともに協働的に学び合える児童を育むためには、教員自身が自分で課題を見つけて、学び続けることが重要であると考えた。そこで、本校の研修体制は、教員が1人1つのテーマをもち、1年間研究を行っている。本研究でいう「教師の個別最適な学び」とは、教員全員が同じことを研究するのではなく、教員が自分の課題と考えている事柄を解決していく研究をしていき、自分自身の学びを深めていくことである。教員が学級の実態から課題を見取り、それを解決していくための手立てを日常の授業で実践し続けることで、子どもたちの学ぶ意欲を高め、学校教育目標でめざしている「学び合い高め合い、賢さをもった児童」が育成されるのではないかと考え、本研究主題を設定した。

(3) 児童の実態

これまで児童は、自分の考えを友だちに伝えることで、考えを深めたり、広げたりするとともに、課題について協力し合って問題解決をするということをしてきている。「書くこと」においても、自分の書いた文章を友だちに見せ、感想をもらったり、共感してもらったりという経験を積み重ねてきた。しかし、実際に書かれている文章の多くは、「公園へ行って、楽しかった。」「ごはんがおいしかった。」など、事柄についての感想だけが述べられ、様子がよく伝わるような文章ではなかった。実際に、「書くこと」に対して、実態調査を取って見たところ、以下のような結果となった。

調査日 令和5年6月

対象：2年生（男子12人 女子13人 合計25人）

	はい できる	どちらかといえばはい どちらかといえばできる	どちらかといえばいいえ どちらかといえばできない	いいえ
1 国語科の学習は好き。	20人 (80%)	2人 (8%)	2人 (8%)	1人 (4%)
2 文章を書くことは好き。	12人 (48%)	7人 (28%)	3人 (12%)	3人 (12%)
3 文章を書くことはできる。	11人 (44%)	5人 (20%)	4人 (16%)	5人 (20%)
4 文章を書くときに難しいと感じることは何か。 (複数回答)	<ul style="list-style-type: none"> ・書くことが思い浮かばない。 ・書くことがたくさんあって決められない。 ・したことや話したこと、聞いたことなどが思い出せない。 ・どんな順番で書いたらいいか、分からない。 ・「、」や「。」、段落をかえるところなど、原稿用紙の使い方がわからない。 ・ひらがなやかん字の書き方を忘れる。 ・書くことが面倒だ。 			

全体として、国語科の学習を肯定的に捉えている児童が多いが、文章を書くことにおいては否定的な考えが多く、文章を書くときの手順や、情報収集の仕方、原稿用紙の使い方や文字の書き表し方などを苦手と感じている児童が多かった。よって、文章の構成の仕方や「書くこと」においての基本的な知識及び技能を身に付けながら、読み手に様子がよく伝わる文章を書けるようになることを研究の課題とし、本主題を設定した。

3 研究仮説

仮説1

国語科「書くこと」の領域の学習指導において、学習の見通しをもたせ、興味関心のわくような言語活動を取り入れ、教員のモデル文を基にしながら構成の検討や考えの形成・記述をしていくことで、伝えたいことを表現豊かに書き表すことができるだろう。

<手立て>

- (1) 単元計画を掲示するとともに、どの単元も学習の流れを統一することで、見通しをもって、安心して学習に取り組んだり、学習を進めたりできるようにする。
- (2) メモを書く段階で、書く視点を与え、どのようなことを書き入れるべきかを提示する。
- (3) 単元の最後に「作文コンテスト」を設けることで、友だちに自分のがんばりを認めてもらえるようにと意欲的に取り組めるようにする。
- (4) 組み立て表のモデルや添削された教員のモデル文を掲示することで、児童がいつでも確認できるようにする。
- (5) 写真や絵を見て、様子を説明する文章を書き、発表し合う。
- (6) 助詞などの正しい使い方を身に付けられるように、日記を書いたり、5問程度のミニテストやプリントに取り組んだりする。

※なお、手立て5・6については、ドリルタイムや授業初めの5分間等を使って取り組むため、日常的な実践とする。

仮説2

推敲する時間において、学び合い活動を取り入れることで、伝えたいことをより明確に書き表せるだろう。

<手立て>

- (1) グループ編成をする際には、上位層・中間層・下位層の児童が混ざり、能力がおおよそ均等になるような3～4人程度にする。
- (2) 教員のモデル文を提示し、どのように直すと、様子がよく伝わる文章になるかをグループで話し合うようにする。
- (3) 見る視点を示すことで友だちの文章に付け足すべき事柄が考えることができるようにする。

4 研究の実践

(1) 研究の実際

研究は第2学年の1学級で実践した。

年間を通して、計3回授業実践を行い、全て自作単元である。

(第3回は、教科書教材の置き換え単元である。)

第1回校内授業研 単元名「1学きの 思い出を 書こう」(7月実施)

第2回校内授業研 単元名「がんばっていることをしょうかいしよう」(1月実施)

第3回校内授業研 単元名「心にのこっていることを書こう」(3月実施)

第1回校内授業研

①令和5年7月 2年生 単元名 「1学きの 思い出を 書こう」

②評価規準(9/11時間)

- ・語と語や文と文との続き方に注意しながら、内容のまとまりが分かるように書き表し方を工夫している。(思考・判断・表現)
- ・友だちの書いた文章を読んで、よかったところや改善すべきところなどを伝えようとしている。(主体的に取り組む態度)

③授業実践

時配	学習活動と学習内容	指導・支援 ○評価 ●研究テーマとの関わり	資料
5	1 前時を振り返り、本時のめあてをつかむ。	・学習計画や前時に書いた文章を確認して本時の活動の見通しをもつことができるようにする。	単元計画表 掲示物
	メモをもとに、「中」の文しょうを書こう。		
15	2 メモを使って、「中」の部分の文章を書く。	・時間的な順序に気をつけて書くことで、どんなことをしたのかが分かりやすい文章になるようにする。 ●聞こえた色や見たものの色、会話文などを入れることで、語彙が豊かな文章を書けるようにする。 ・書き進められない児童には、グループの友だちに、どんなことを書けばよいか聞いてもよいと声かけをする。 ○語と語や文と文との続き方に注意しながら内容のまとまりが分かるように書き表し方を工夫している。 (思考・判断・表現)【観察・ノート】	付箋 ノート
10	3 書いた文章を見せ合い、よいところや内容の伝わりづらいところを伝え合う。	・友だちに書いた文章を読んでもらうことで、説明の足りない部分はないか、付け足した方がよいところはないかを見つけられるようにする。 ・悩んでいるところがある人は、グループの友だちに相談してもよいことを伝える。	

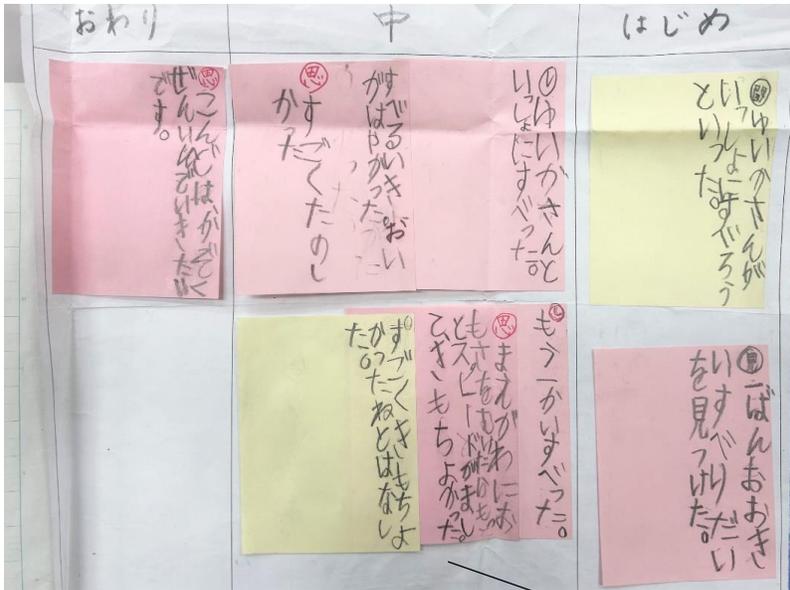
		<ul style="list-style-type: none"> •助言するところが見つからない児童にはよいところはないか声かけをする。 ●友だちに書いた文章を見てもらうことで、様子をくわしく書き表せるようにする。 ○友だちの書いた文章を読んで、よかったところや改善すべきところなどを伝えようとしている。 <p style="text-align: center;">（主体的に取り組む態度）【観察】</p>	
8	4 友だちにもらった助言をもとにして文章を直し、読み返す。	<ul style="list-style-type: none"> •文章をすべて消すのではなく、必要な部分だけを直したり、付け足したりするように声かけをする。 •直し終わった児童から、自分の書いた文章を読み直すように伝える。 	
3	4 友だちとの交流を通して、わかったことを発表する。	<ul style="list-style-type: none"> •友だちの文章を読んでよかったことや、友だちからもらった助言から分かったことなどを全体に伝えるようにする。 	
4	5 学習のふり返りと次時の活動の確認をする。	<ul style="list-style-type: none"> •今日の活動を振り返り、できたこと、もう少しだったことなどを振り返りカードに書く。 	ふり返りカード

④ 実際の授業の様子

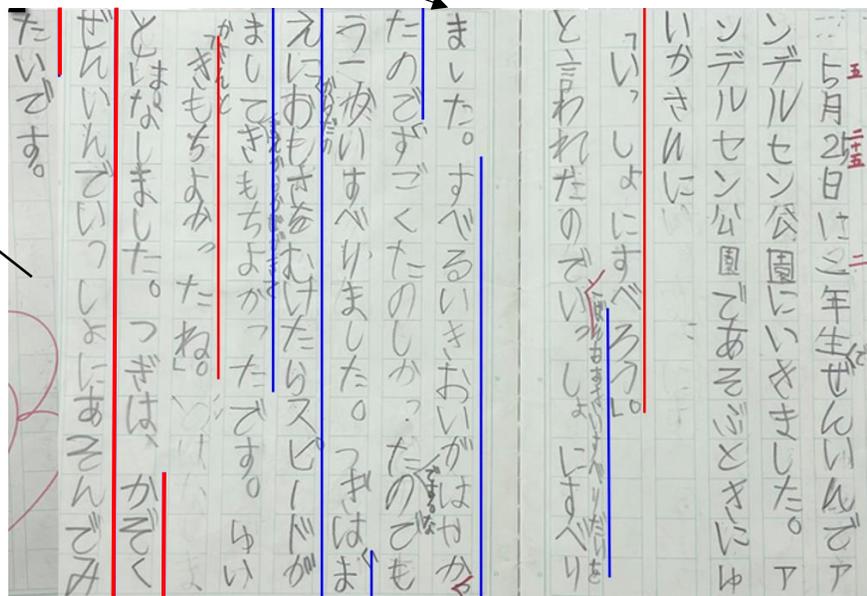
ア 仮説1において

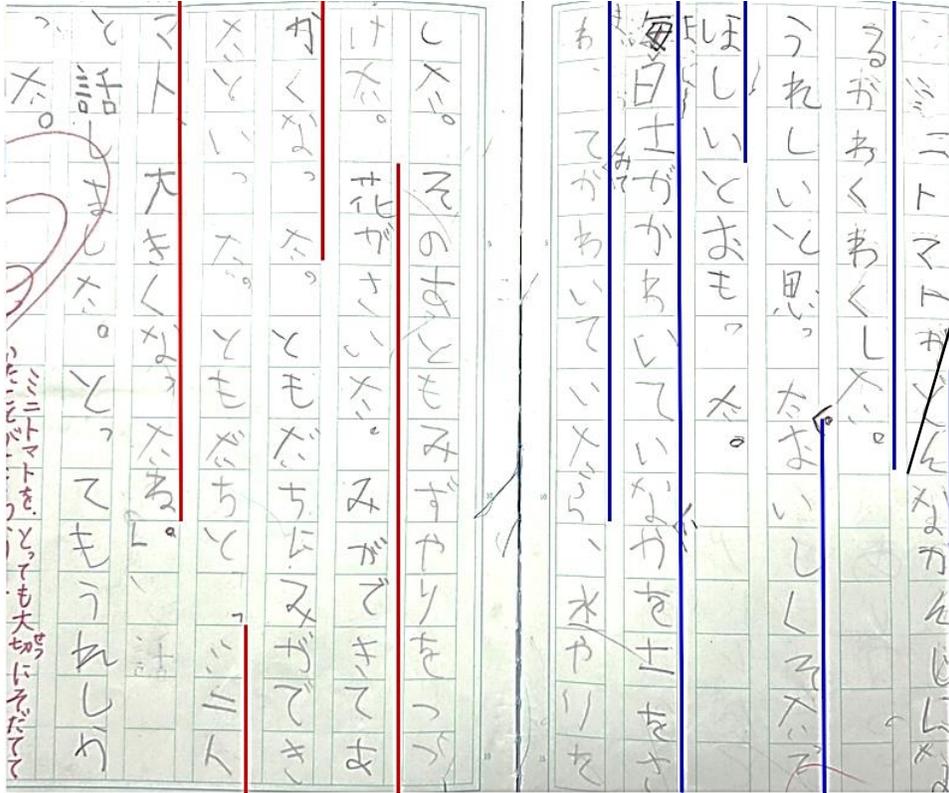
<成果>

- 組み立てメモを作る際に、会話文についてのメモは黄色、見たことや思ったことなどについてのメモはピンク色と色分けし、聞こえた音や見たものの色などの情報を入れるように声かけした。そうしたことで、清書の段階には、24人が会話文を入れ、5人が色について、10人が形について、1人は時間の長さなども入れながら、文章を書くことができた。自分の気持ちについて書けた児童は19人、気付いたことを書いた児童は2人おり、単元を学習する前よりも、経験したことを具体的に書くことができるようになった。(手立て2)



友だちに助言をもらったことで、どんなすべり台をすべったか、何の重さについて書いたのかななどを付け足した。また、気持ちや様子を表す言葉を入れるとよいことに気づき、書くことができた。(資料編A児)



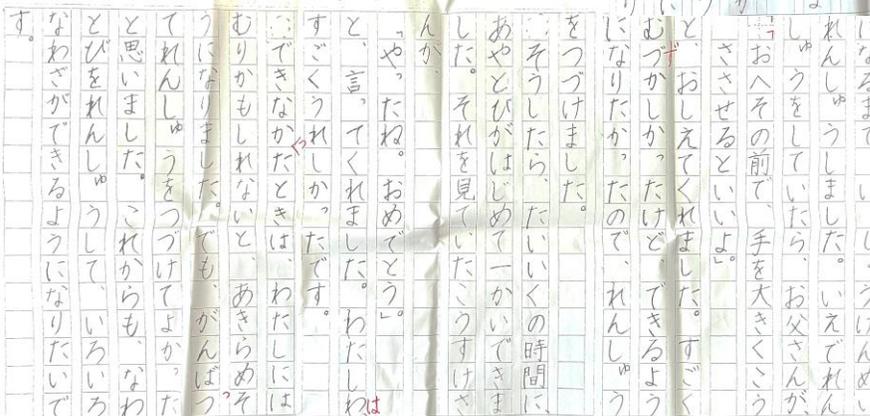


はじめの頃は、三十字程度しか書くことができなかった児童も、学習をとおして気持ちや様子をあらわす言葉を入れて、百字程度書けるようになった。
 (資料編B児)

<課題>

- 教員のモデル文として提示したものの中に説明が不足しているところや付け足した方がよいところがなかった。そのため、友だち同士で書いた文章を読むときに、それらについて気付くことができなかった。

(手立て4)



- 作文コンテストでは、全員が評価してもらえるように「こんなところがすごいカード」を使った。評価項目の中で特に優れているところに小シールを1枚貼り、読んだ作品の中で1番よかったものには大シールを貼らせた。(手立て3)しかし、大シールが貼られていない児童で自分の作品がよくなかったと否定的に捉える児童もいた。作文コンテスト自体は、どの児童も楽しみにしているようだったが、評価の仕方を改善させた方がよい。



イ 仮説2において

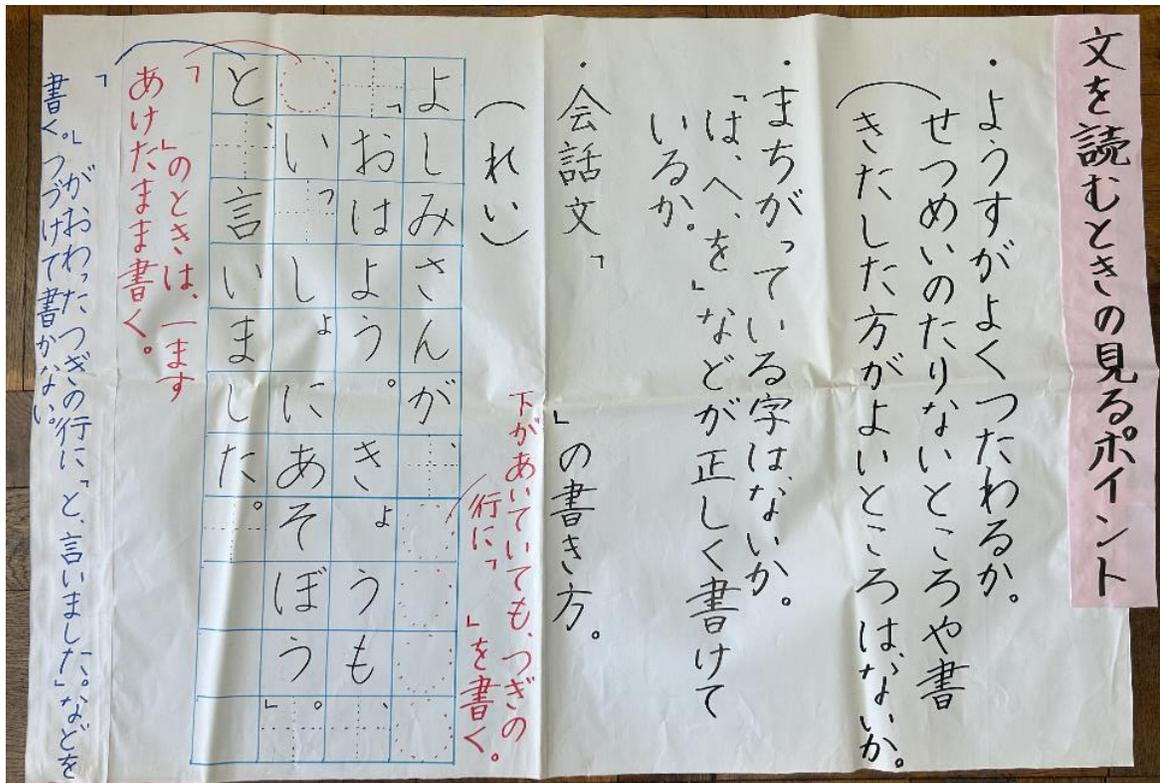
<成果>

- 今まで書いた文章や文章の読み取り能力などから上位層を4割、中間層を3割、下位層を3割に分けた。どのグループもおおよそ均等になるようにグループ編成をしたことで、どのグループも推敲の時間は、友だちの文章を読んで、助言できていた。(手立て1)
- 教員のモデル文を用い、文章を読み、個→グループ→全体という順に添削したことで、誤字脱字、かぎ(「」)の使い方が理解できた。(手立て2)

<課題>

- 本時を展開した際には、友だちの書いた文章を見るとき視点を与えたが、それらを網羅することは発達段階的にも難しく、友だちの書いた文章を十分に読み、添削できなかった。

(手立て3)



第2回校内授業研

①令和6年1月 2年生 単元名 「がんばっていることをしょうかいしよう」

②評価規準（9／11時間）

・語と語や文と文との続き方に注意しながら、内容のまとまりが分かるように書き表し方を工夫している。
（思考・判断・表現）

・友だちの書いた文章を読んで、よかったところや改善すべきところなどを伝えようとしている。
（主体的に取り組む態度）

③授業実践

時配	学習活動と学習内容	指導・支援 ○評価 ●研究テーマとの関わり	資料
5	1 前時を振り返り、本時のめあてをつかむ。	・学習計画や前時に書いた文章を確認することで本時の活動の見通しをもつことができるようにする。	単元 計画表 掲示物
	ようすがよくつたわる文になっているかをたしかめよう。		
15	2 メモを使って、「中」の部分の文章を書く。	・時間的な順序に気をつけて書くことで、どんなことをしたのかが分かりやすい文章になるようにする。 ●思ったことや考えたこと、会話文などを入れることで、語彙が豊かな文章を書けるようにする。 ・書き進められない児童には、メモに書いたことを、順番に書き進めればよいと、声かけをする。 ○語と語や文と文との続き方に注意しながら内容のまとまりが分かるように書き表し方を工夫している。 （思考・判断・表現）【観察・ノート】	ワーク シート
10	3 書いた文章を見せ合い、よいところや内容の伝わりづらいつころを伝え合う。 <友だちの文を読むとき> ・ようすがよくつたわるか。 ・何回か声に出して読む。 ◇ようすをくわしくつたえるには いつ だれ どんなこと 何のために どんなふうに どれくらい ◇きもちをあらわすことば くやしい うれしい かなしい たのしい	・見る視点を与えることで、直したり、付け足したりした方がよいところを見つけられるようにする。 ・悩んでいるところがある人は、友だちに相談してもよいことを伝える。 ・助言するところが見つからない児童にはよいところはないか声かけをする。 ●友だちに書いた文章を見てもらうことで、様子をくわしく書き表せるようにする。 ○友だちの書いた文章を読んで、よかったところや改善すべきところなどを伝えようとしている。（主体的に取り組む態度）【観察】	
8	4 友だちにもらった助言をもとにして、文章を直し、読み返す。	・文章をすべて消すのではなく、必要な部分だけを直したり、付け足したりするように声かけをする。 ・直し終わった児童から、自分の書いた文章	

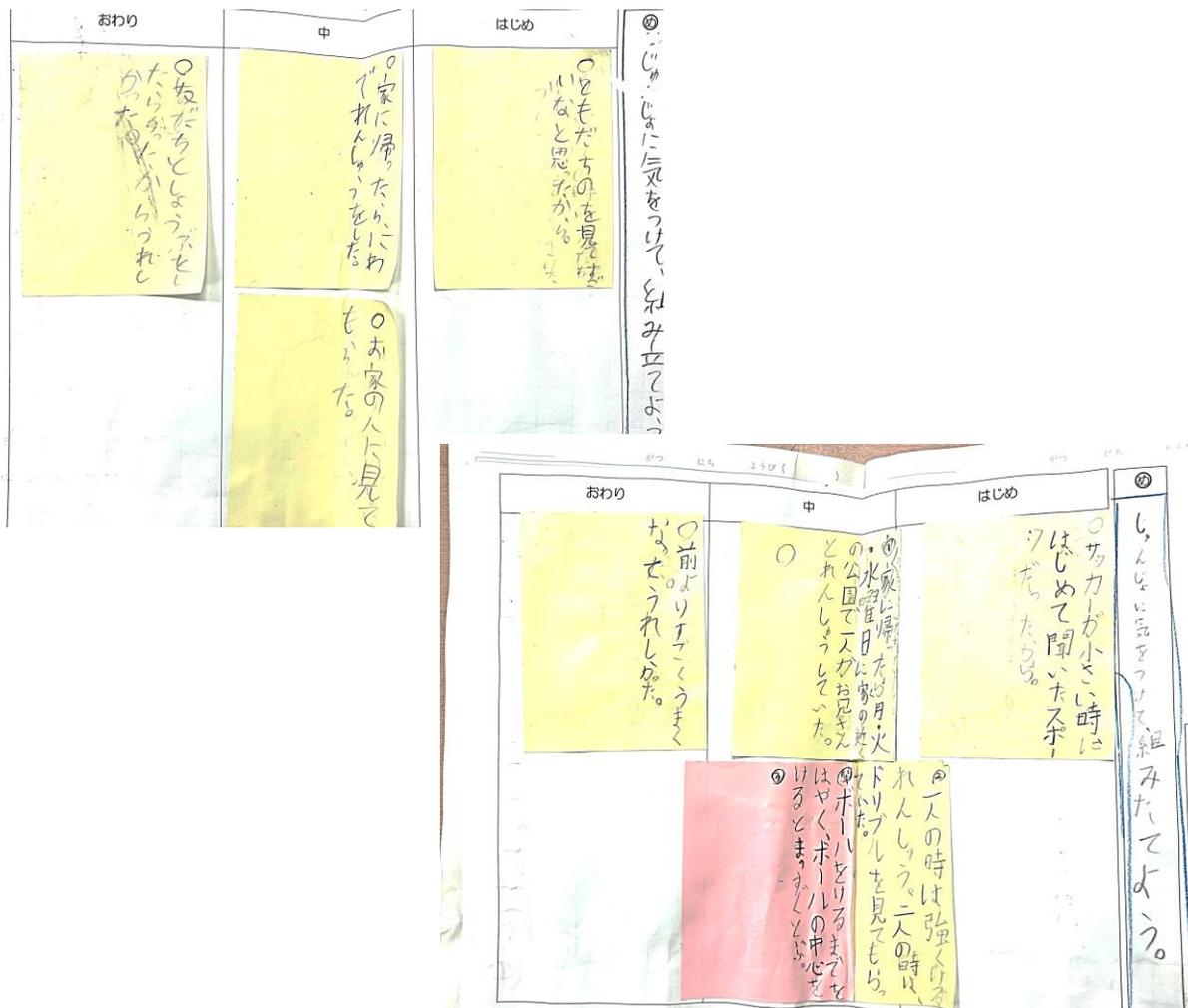
	<p>3 5 友だちとの交流を通して、わかったことを発表する。</p>	<p>を読み直すように伝える。</p> <p>・友だちの文章を読んでよかったことや、友だちからもらった助言から分かったことなどを全体に伝えるようにする。</p>	
	<p>4 6 学習の振り返りと次時の活動の確認をする。</p>	<p>・今日の活動を振り返り、できたこと、もう少しかったことなどを振り返りカードに書く。</p>	<p>ふり振り返りカード</p>

④ 実際の授業の様子

ア 仮説1において

<成果>

- ・メモを書く段階で「がんばろうと思ったきっかけ」「どんなふうに取り組んでいるのか」「努力してみてもうまくいかなかったこと」「できるようになってきて思ったこと」の4つのことについて、どの児童も自分のがんばっていることに対してどのように取り組んでいるのかが分かる文章が書けた。(手立て2)



- 作文コンテストの評価の仕方を以下のようにした。
 - 「金：どのような取り組みをしてきたかがよくわかる」・・・3点
 - 「銀：どのような取り組みをしてきたかが概ねわかる」・・・2点
 - 「銅：がんばって文章を書いている」・・・1点
- としたことで、よりよい色のシールをもらいたいと考えて、取り組んでいた。また、第2回で優勝できなかった児童からも次回への意欲につながる振り返りが見られた。(手立て3)

<課題>

- 書く視点に沿って全員の児童が書き進めることはできた。しかし、メモを書いた時点で、書きたい主な内容を整理したはずだったが、書きたい主な内容には関わりのない文章を書いている児童もいた。(手立て2) 児童は、文章をよく書けたと満足していたが、内容にまとまりがなくなっていたため、必要のない文章を削ることが必要だった。

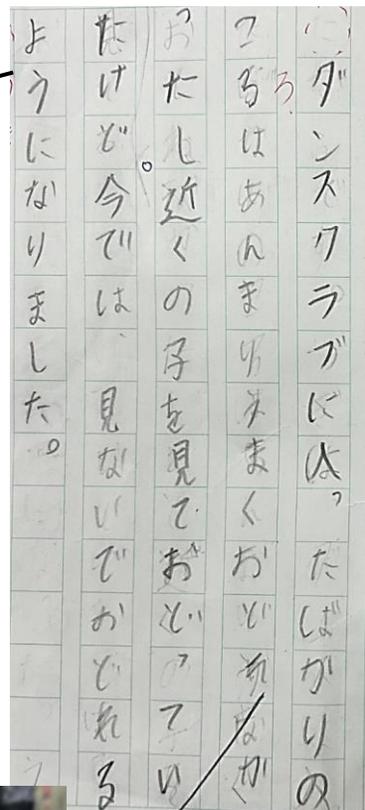
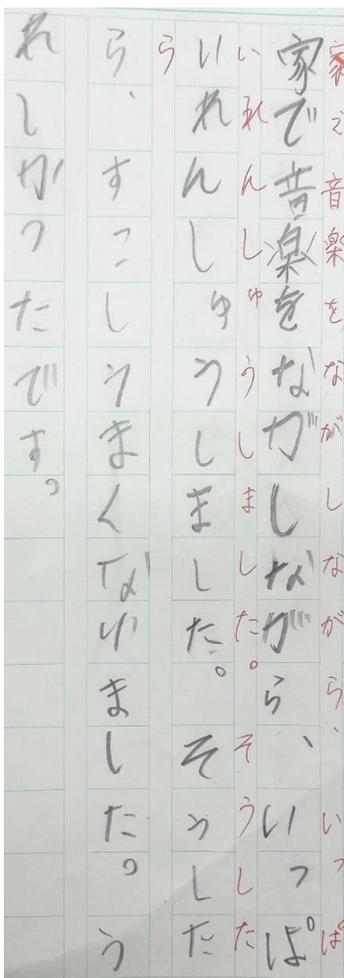
イ 仮説2において

<成果>

- 友だちにした文章を見せ合う活動に入る前に、教員が具体例を出しつつ、見る視点を伝えたことで、友だちの文章に何が不足しているのかを見つけることができていた。(手立て3)



- 文章を読んだ友だちが「どんなふうに」「どのくらい」「今はどうなったのか」ということがわからないと文章を書いた本人に問いかけ、話し合いながら必要なことをつけ足したり、どう書き表すとよいかを一緒に考えたりするなどして、文をよりよくしようとしていた。(手立て1)



「どんな練習をして、できるようになったかわからない。」と文章を読んだ友だちが気づき、グループで話し合いながら文章に付け足しをしていた。
練習のときの様子にぴったり合う言葉を見つけるために、他のグループも一緒になりながら話し合いを進めていた。



<課題>

- 前回とは、異なったグループ編成をしたが（手立て1）下位層の児童は、上位層や中間層の友だちの考えを聞くだけになり、自分の考えを伝えることができていなかった。下位層の児童でも自分の考えを伝えられる方法を考える必要がある。

第3回校内授業研

①令和6年3月 2年生 単元名 「心にのこっていることを書こう」
 教材名 【こんなことができるようになったよ】

②評価規準（9／11時間）

- ・語と語や文と文との続き方に注意しながら、内容のまとまりが分かるように書き表し方を工夫している。（思考・判断・表現）
- ・友だちの書いた文章を読んで、よかったところや改善すべきところなどを伝えようとしている。（主体的に取り組む態度）

③研究実践

時配	学習活動と学習内容	指導・支援 ○評価 ●研究テーマとの関わり	資料
5	1 前時を振り返り、本時のめあてをつかむ。	<ul style="list-style-type: none"> ・学習計画や前時に書いた文章を確認して、本時の活動の見通しをもつことができるようにする。 ●前単元と学習の流れを同じにすることで、見通しをもって取り組めるようにする。 	単元 計画表
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;"> ようすがよくつたわる文になっているかをたしかめよう。 </div>		
20	2 前時に書いた文章を友だちと読み合い、よいところや内容の伝わりづらいところを伝え合う。 <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin-top: 10px; width: fit-content;"> ようすがくわしく書けているか。 </div> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin-top: 10px; width: fit-content;"> かんけいのない文はないか。 </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・教員のモデル文を添削したときのことを確認し、様子を詳しく書くときのポイントを確認する。また本題と関係のないことが書かれていたときには省くように伝えることも確認する。 ・見る視点を与えることで、直したり、付け足したりした方がよいところを見つけられるようにする。 ・読んだ人が気付いたことを付箋に書いて伝えることで、文章を書き直す際に参考となるようにする。 ・悩んでいるところがある人は、友だちに相談してもよいことを伝える。 ・助言するところが見つからない児童にはよいと思ったところに付箋を貼るようにする。 ・どのように直したらよいか悩んでいる児童には掲示物を参考にさせ、書き加えられるところはないか、関係のない文章はないか、考えるように声かけをする。 ○友だちの書いた文章を読んで、よかったところや改善すべきところなどを伝えようとしている。（主体的に取り組む態度）【観察】	ノート 掲示物 付箋
12	3 友だちにもらった助言をもとにして文章を直し、読み直す。	<ul style="list-style-type: none"> ●友だちに書いた文章を見てもらうことで、表現豊かでの確な文章が書けるようにする。 ・友だちが書いた付箋の内容について、理解できなかったときには、聞きに行ってもよいことを伝える。 ・文章をすべて消すのではなく、必要な部分だ 	

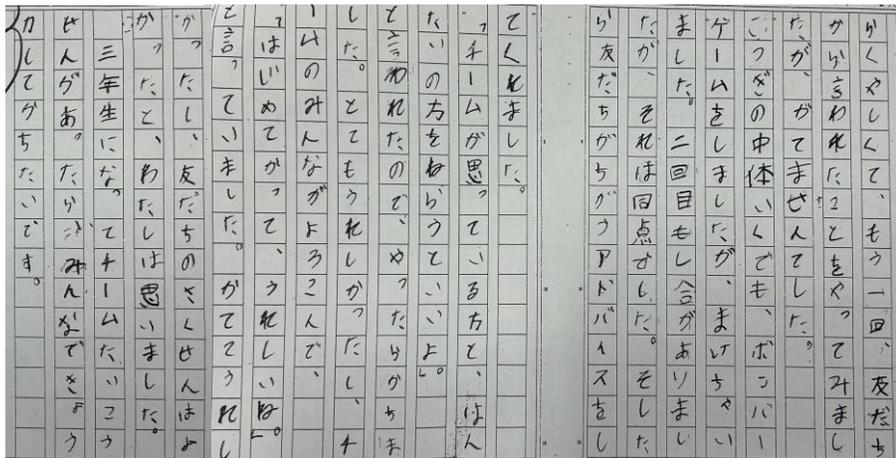
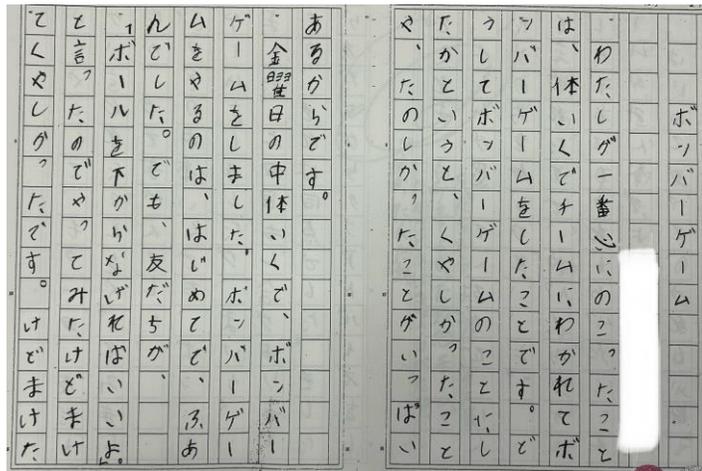
		<p>けを直したり、付け足したりするように声かけをする。</p> <p>・直し終わった児童から、自分の書いた文章を声に出して読み、誤字脱字などの確認をするように伝える。</p> <p>○文章を読み返す習慣を付けるとともに、間違いを正したり、語と語や文と文との続き方を確かめたりしている。</p> <p>(思考・判断・表現)【観察・ノート】</p>	
3	4 友だちとの交流を通して、わかったことを発表する。	<p>・友だちの文章を読んでよかったことや、友だちからもらった助言から分かったことなどを全体に伝えるようにする。</p>	
5	5 学習の振り返りと次時の活動の確認をする。	<p>・今日の活動を振り返り、できたこと、もう少しだったことなどを振り返りカードに書く。</p>	振り返りカード

④ 実際の授業の様子

ア 仮説1において

<成果>

- ・「なぜその事柄を選んだのか」「どのようなことが特に心に残っているのか」などの事柄を書き入れさせたことで、どの児童も自分の心に残っていることについて詳しく書くことができた。(手立て2)



- 次には何をすればよいのかが分かるため、児童同士で声をかけ合い、主体的に学習を進めることができた。毎時間取り組ませていた振り返りにも、肯定的な言葉が多く書かれていた。(手立て1)



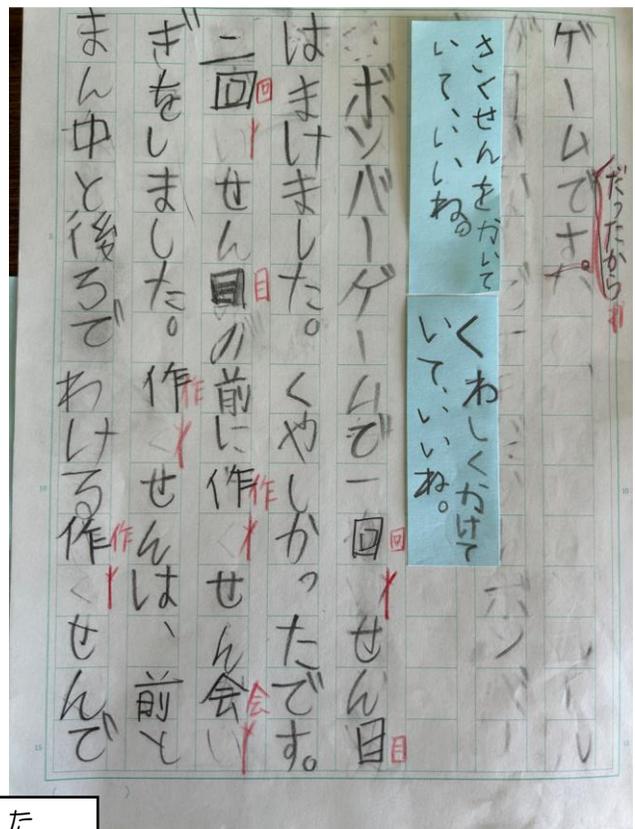
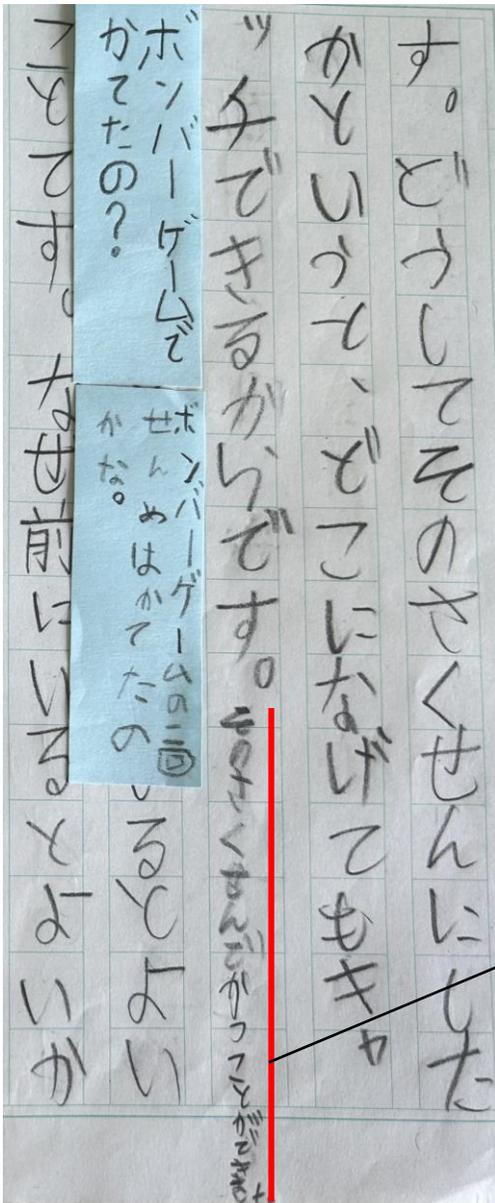
<課題>

- 第1回に取り上げたテーマと同じテーマについて書く児童が数人いた。以前書いた時よりもまとまった分かりやすい文章となっていたが、メモを書く際に、個別に別の書く視点を与えるなどして、内容に変化をつけたらよかった。(手立て2)

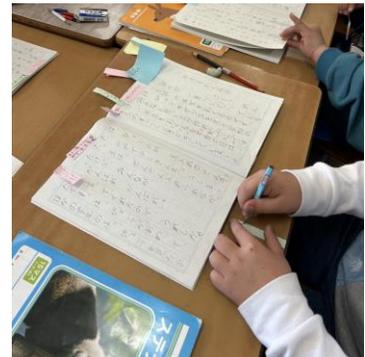
イ 仮説2において

<成果>

- 「様子が詳しく書けているか」「関係のない文章はないか」などの見る視点を与えたことで友だちの書いた文章をよく読もうとする姿が見られた。(手立て3)
- 読んで感じたことを付箋に書き、友だちに伝えるようにしたことで、直すところだけではなく、文章のよかったところを伝えている児童も多く、下位層の児童でも自分の考えを書くことができた。(手立て1)



友だちの助言から付け加えた方がよいところに気付くことができた。



日常的な実践

(1) 写真や絵を見て、様子を説明する文章を書く。(手立て6)

<成果>

- 書いた文章を発表し合った際に、自分では気付かなかった表現の仕方を知ることができ、再度文章を書かせてみると、友だちのよいところを取り入れて書く児童が増えた。

下位層の児童の変容①

うんどう会ではしている。

↓

天気がいい日に、うんどう会で女の子が
たいそうふくをきて、うれしそうに、はしている。

下位層の児童の変容②

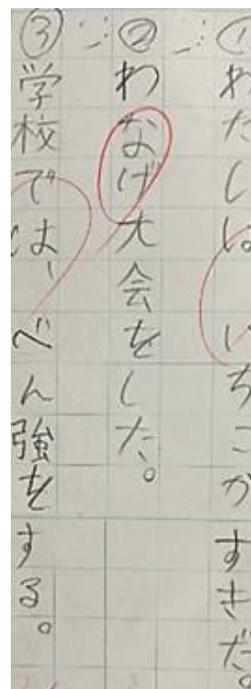
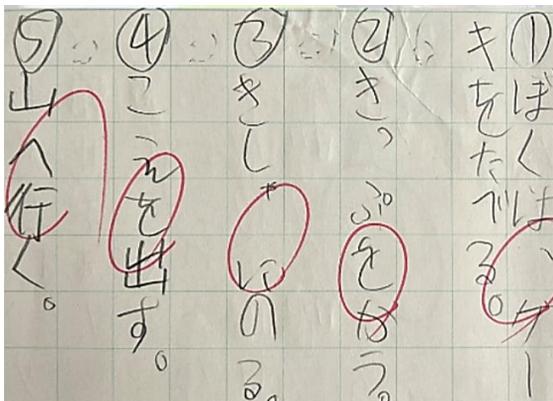
たいいくの時間に、はしている。

↓

天気がいい日に、女の子がにこにこしながら
楽しそうに、はしている。



- 授業の最初の5分などを使い、助詞の正しい使い方に関して、5問程度のミニテストをしたり、プリントを月1回程家庭学習で取り組ませたりしたことで、始めは助詞を正しく使えなかった児童も正しく書けるようになってきた。



5 成果（○）と課題（▲）

- 同じ学習の流れで取り組むことで、児童が学習の見通しをもって取り組めた。
- 書く視点をどのようにして見つければよいのかを段階を踏んで経験してきたことで、自分の書きたい事柄について、どう書き表せばよいか、悩まずに取り組めるようになってきた。取り組む前は、自分で文章を書き進められなかった児童が自分で書き進められるようになったことで、全体としても文章を書く力が底上げされた。また、経験したことを自分が思ったように伝えられるようになったことで書くことが楽しい・うれしいとふり返りに書く児童が多くなった。
- 友だちに読んでもらうことで、自分で見落としていた点に気づき、文章に書き加えることができた。
- 友だちの文章を読むときに、見る視点を与えたため、付け足した方がよいところを見つけることができるようになった児童が多かった。
- 毎週日記に取り組んだことで、書くことや文章の書き方に慣れることができた。読み手がいることで、自分の考えに理由をつけて伝えたり、詳しく書いたりできるようになってきた。
- 毎時間振り返りを書かせたことで、児童の困っていることや次時にがんばりたいことなどが把握でき、支援することができた。また、教員が朱書きを入れることで、児童の意欲にも繋がったと考える。
- ▲研究を進めるにつれて、上位層の児童が「書くこと」に対しての知識・理解が深まっていったこともあり、十分に書くことができている児童でも、自分の理想よりも自分の書いている文章が劣っていると感じ、「書くこと」への評価が否定的になった。教員や友だちからの働きかけをもっと多くしたり、自分の家族や上学年の児童、校内の教員に自分の書いた文章を読んでもらい、称賛してもらう機会を設けたりしていきたい。
- ▲個々の力は上がってきているが、個人差がある。どんな文章がよい文章であるかを理解させ、自分の文章と比較、推敲する力を養う必要がある。
- ▲友だちの文章を読むときに、助言できない児童がいた。どの子も自分の考えを伝えられるように、いくつかの評価例を提示し、参考にできるような支援が必要だった。
- ▲伝えたいことはわかるが、文章としては語と語のつながりが成り立っていない表現があった。教科書や書籍に書かれている文章により多く触れ、正しい表現方法を身に付けていく必要がある。
- ▲自作単元を取り入れていたため、学習の遅れをつくらないようにしなければならなかった。繰り返し児童の文章を読んで添削したため、多くの時間と労力が必要だった。
- ▲児童の書いた文章には楽しいという表現が多く使われていた。今後は楽しいという言葉以外でも、楽しさが伝わるような表現に触れ、語彙を増やせるようにしたい。